

OCHADAI GAZETTE

お茶の水女子大学学报 第230号 2011年10月1日

OCHADAI GAZETTE Autumn, 2011



リーダーシップとは何か

CONTENTS

TOPICS

- | | |
|---|---|
| 学長からのメッセージ…………… 1-2
共に、未来へ。 | 附属学校園からのお知らせ…………… 7-8 |
| 学生のアクティビティ…………… 3-4 | キャンパス点描…………… 9-10 |
| 教員紹介…………… 5
● 中野 裕考 先生(大学院人間文化創成科学研究科) | ● お茶大インフォメーション・プラザがオープン！
● 芸術・表現行動学科舞踊教育学コース「特別賞」受賞
● 春の叙勲受章者(本学関係)について |
| 卒業生紹介 …………… 6
● 光畑 由佳 氏(家政学部被服学科卒業) | |



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

学長からのメッセージ

共に、未来へ。



この夏、本学博士課程の大学院生が、理系の優れた女性研究者を顕彰する賞をうけました。彼女は、お茶の水女子大学で学び研究していることの感想を次のように話してくれました。

「私はこの大学に入学した時点では、ブランド力・少人数教育などといった、いわゆるお茶大のメリットが、表面的にしか見えておりませんでした。しかし、1年2年と経つうちに、ここで自分が変わったと感じ、大学院進学時には他の大学院への進学はまったく視野に入れませんでした。」

「自分が変わった」とこの学生が感じたのはなぜなのでしょう。

女子大学であるが故に、何をするにも全ての役割を女性が担い、「できる人が、できることをする」という風土が本学にはあります。そのために学生には新たな能力を発見するチャンスが多くあるようです。また、研究生活では、お互いを尊重しながら自由闊達な議論ができるのも本学の特色といえます。

お茶の水女子大学は、東京女子師範学校(1875年設置)を前身とし、130余年にわたって先駆的な教育者や研究者を育成してきました。そして現在では、教育・研究分野に限らず、公的機関・生産・流通・メディアなど、多様な分野で活躍する多くの卒業生を輩出しています。

しかし日本の社会全体では、国際的にみて女性の活躍の割合が著しく低く、とくに意志決定過程に占める女性の割合が低いことが問題視されています。そこで、女性の社会的活躍をさらに促進するために、国の方針として、「2020年までに指導的地位に占める女性の割合を少なくとも30%にすること」が決定されました(2003年6月男女共同参画推進本部決定)。女性の高等教育進学率が40%を超えているのに対して、女性の管理的職業従事者の割合は10%台にとどまっていることは、高等教育への社会資本の投資効果の点でも問題とされます。

この方針の意味は、単に活躍する女性の数を増やすことだけではなく、女性が社会的に活躍することによって、多様性のある豊かな社会を築くことを目指していると、私は理解しています。

本学は2006年に「女性リーダー育成プログラム」を開始しましたが、このプログラムの意図もそこにあります。

－リーダーシップ教育－

リーダーとはどのような存在であり、リーダーシップとは何を意味するのでしょうか。

リーダーの在り方については、大きく二つの考え方があるように思います。一つは、組織の頂点で権力を集中させる在り方、他は、組織の基盤を支える在り方です。リーダーというとき、一般的には前者を念頭に置いていることが多いようです。この場合、リーダーシップは上から下への指示を徹底することが重要です。それに対して、「サーバント・リーダーシップ」ともいわれる後者は、組織活動の末端あるいは最前線の視点を重視するものです(cf. 池田守男・金井壽宏「サーバント・リーダーシップ入門」かんき出版 2007年)。



どちらの場合も、組織全体を掌握する点は同じですが、主眼の置き方が異なります。

これらに対して、「リーダーシップ・アンサンブル」という考え方もあります。これは、指揮者のいないオーケストラをモデルに、構成員が相互に協調しつつ、時に応じて誰かがリーダーの役割を担うような組織の在り方です。(cf. H. Steifter & P. Economy, *Leadership Ensemble, Lessons in Collaborative Management from the World's Only Conductorless Orchestra*, Times Books, 2001)

「リーダー」「リーダーシップ」の概念は、このように多様なのです。

お茶の水女子大学の学生には、高校時代から「リーダー」としてリーダーシップを発揮してきた学生も多くいますが、「リーダー」という言葉に抵抗のある学生もいます。その理由は、「リーダー」を、強権によって組織を牽引する存在、と考えているからのようです。

本学のリーダー育成では、「知性」「心遣い」「しなやかさ」をキーワードとしています。確かな知性を習得することを大前提に、他者を尊重し自らを尊重し、そして多様な状況の変化に対応できる柔軟で強い意志をもつことを学生に期待しています。とくに本学の卒業生は、社会の様々な場で活躍しており、その姿は学生の格好のロールモデルになっています。女子学生が多様な将来モデルに身近に接することができるのは、女子大学の大きな特色でもあります。

－社会へ、世界へ－

大学は社会的存在です。同時に大学は常に国際社会の動きにも敏感でなくてはなりません。

そこで、社会とのインターフェイスの場を構築したいと考え、2011年4月には、正門脇に「お茶大インフォメーション・プラザ」を開設しました。本学がこれまで地域との連携に積極的に取り組んできた、その象徴ともいえるでしょう。

また、国際性を強化するために、大学間交流協定の締結を進め、学生の海外派遣プログラムを充実させることにも本学は力を入れています。

さらに、本学の途上国女子教育支援は、国立大学の中でもとくに高く評価されている事業です。昨年は、学生のアイデアを取り入れて大学グッズを新たに製作しましたが、その際に、売り上げの一



部を途上国の女子教育支援に役立てるようなシステムも作りました。これは、学生の意識が既に国際的な視点にあることの一つの証といえます。

－共に、未来へ－

2011年3月には、新しい学生寮「お茶大Students Community Commons」を竣工しました。この寮の理念は「共に住まい、共に学び、共に成長する」です。これに先立って2007年には、大学附属図書館に「ラーニング・コモンズ Learning Commons」というスペースを作りました。図書館のこの機能は多くの大学図書館の先駆けとなりましたが、そこでの理念は、「共に学び、共に成長する」でした。

このように、本学が重視しているリーダー育成事業の根底にある考え方は、「共に在る」ことです。今年3月11日の大震災と、その後の原子力発電所の事故による甚大で悲惨な被災状況に接し、国立の高等教育機関として果たすべき役割を今も模索し続けていますが、学問の在り方と教育の在り方が問われていることは確かであり、そして何より明らかなことは、「共に在ること」の大切さです。

お茶の水女子大学でも200名を超える被災地出身の学生が、このキャンパスで学んでいます。彼女達を含めたすべての学生・教職員と共に、そしてこれから入学する学生と共に、大学と学問の在り方を追求し、少しでも豊かで明るい未来を築くことができるよう、微力を尽くしたいと思います。

2011年秋

お茶の水女子大学長
羽入 佐和子



学長からのメッセージ
共に、未来へ。

学生のアクティビティ

徽音祭実行委員会の活動

第62回徽音祭実行委員会は、お茶大の一大イベントである学園祭・徽音祭を盛り上げるべく、日々活動しております。

第62回を迎えた今年度の徽音祭テーマは「COLORFUL～What's your color?～」。

毎年多くの方々のご参加・ご協力により運営を続けておりますが、特に今年度は学生の個性のあらわれる場としての開催ということを念頭に置いています。

私たち徽音祭実行委員会でも、この第62回メンバーとしての個性・目指したいものは何か、と考え、「chain」を第62回実行委員内のテーマとしました。

各担当に分かれての活動だけでなく、球技大会をして親睦を深めるなど、委員内の絆を大切に活動しています。

ここでは、毎年恒例かつ、今年ならではの企画を4つご紹介します。

まず、水コン。毎年恒例の徽音祭目玉企画で、『お茶大生が憧れるお茶大生NO.1』を決定するコンテスト形式の企画です。

6名のファイナリストが、自己PRをはじめ、様々な種目で競います。そして審査員とステージを見ている来場者のみな

さんの投票により、最も魅力的で輝いているお茶大生を決定します。

東日本大震災を受けた企画もあります。ビンゴdeチャリティーは、水コンの間に行われる企画なのですが、ビンゴカードの売り上げを、全額東日本大震災の義援金として寄付する、というのが今年ならではの企画です。

参加団体コンテストでは、今年の徽音祭で最も輝いていた参加団体を決定します。食品部門と展示・発表・販売部門の2部門で、それぞれの1位を来場者のみなさんの投票で決定するので、参加団体はこの企画に全力を注ぎます。

毎年恒例のスタンプラリーもグレードアップした内容になりました。正門付近のスタンプラリーの企



パンフレット販売



徽音祭の目玉企画のひとつ『水コン』



受験生相談



制作途中の階段装飾

画テントで配布している台紙の裏に書いてあるヒントをもとに、6つのスタンプを集める企画です。

最後に、受験生相談。現役のお茶大生が自身の経験を生かし、訪れる未来の後輩の相談に応じます。こちらは受験生以外の参加も可能ですので、ぜひ皆様にご参加いただければと思います。

また、会場の装飾にもぜひご注目ください。今年のテーマに合わせ毎年行われている正門の装飾・階段装飾も華やかでカラフルなものが完成しました。

来場者の皆様、参加団体、そして私たちも、徽音祭にかかわ

るすべての人が徽音祭を楽しめればと考えております。皆様のご来場を徽音祭実行委員一同、心よりお待ちしております。

文責：中山翠

(第62回徽音祭実行委員会広報・映像担当、文教育学部2年)

第62回徽音祭実行委員会 連絡先

ホームページ : <http://kiin2011.web.fc2.com>

Twitter : <http://twitter.com/#!/kifc2011>

Blog : <http://kifc2011.blog.fc2.com/>



学生のアクティビティ

教員紹介

ご自身の研究や教育観を語っていただく「教員紹介」。今回は昨年4月に着任された大学院人間文化創成科学研究科文化科学系助教の、中野裕考先生にお話を伺います。



Hiroataka Nakano
中野 裕考

先生の公演でたまたまメキシコについていき、メキシコの国立大学は教育水準が高い割に学費がないに等しく、しかもうまくいけば奨学金も受けられることを知りました。

の一人がカントです。ですからカントが表現した物の見方から出ていこうとするなら別の前提に立つてカントを批判するのではなく、カントの著作そのものの中にカントからの出口を見出さなければなりません。博士論文で目指したのもそのことですし、今回の受賞論文もその流れです。カントは、ものごとを認識する際には「直観」と「概念」が必要だと言いますが、一般に「直観」は外部から入ってくる受動的なデータ、「概念」は人間の側から自発的に直観に当てはめるもの、と解釈されています。しかし私は、全く受動的に受け取られる直観データなど存在しない、自発性は直観を受容するためにも必要であると考えました。そう考えないと、カントの体系の中で「時間」をうまく位置づけられないからです。この問題を扱ったカントのテキストは異様な難解さで有名な数ページなのですが、私にはそこが一番面白かった。「直観」における自発性、あるいは知覚主体自身の運動を考えると「時間」を解き明かす仕組みになっている、と考えられるからです。私が踊りをやっていたのは、体を通じて考えるということが自分には欠けていることを、哲学を通して気付いたからで、即興的に体を通して何が表現できるか、試してみたかったのです。それは、物事の知覚と身体の運動、という私の研究テーマにつながっています。

近代哲学に身体性を取り戻す

中野先生は、学部では文教育学部人文科学科、大学院では比較社会文化学専攻にご所属で、西洋哲学史、西洋近代哲学、現代哲学などを講じていらつしゃいます。

ご出身は？ ご専門は？

仙台市の出身です。カントを中心とする近代哲学が専門です。

なぜ哲学を選ばれたのですか

最初は東大の文I(法学部予定)に入りました。入学後、阪神淡路大震災・オウム事件・酒鬼薔薇事件などが次々に起こり、それまでの「当たり前」がいつべんに吹き飛びました。「オウム信者に向かって自分たちの方が正しいと説得できるだろうか」とか、「彼らを暴力的に排除している点で、世間も自分も彼らと同じではないか」とか、そんなことばかり考えていました。そんな中で、「自由」「平等」「人権」といった概念の内容を問わずに前提して出発する法学部の授業に違和感をもち、3年次に文学部に進学しました。私たちのものの見方・考え方・価値の意識を規定している枠組みは何なのか。現在自分や社会が抱えている問題の根元にあるその思考の枠組みを変えることができるのであればいいか。そういったことを考える学問をしたと思ったのです。

メキシコに留学されたのですよね

修士課程在学中に博士論文の核となる構想が浮かび、それを現実化するための環境を模索していました。私は踊りをやっていたのですが、踊りの

修士修了とともにメキシコに渡り一年間スペイン語を勉強した後、メキシコ国立自治大

学哲学文学部博士課程に入学し、カント哲学について学位を取りました。お金の心配を全くせずに、朝から晩まで研究をしていればよい理想的な環境でしたよ。メキシコという国の寛大さには心から感謝しています。

カントといえば「時間に正確無比」のイメージがあるのですが…

私ももともと時間に正確な方ですが、メキシコに行って時間にルーズなことに対して寛容になりました(笑)。カント哲学とラテン文化の間でバランスがとれたかもしれません。

学会賞を受賞されたと伺いました

今年の5月に「主観の行為としての運動」という論文で、日本哲学会若手奨励賞をいただきました。先ほど言った博士論文のアイデアにも関わる問題なのですが、私も最初はニーチェ、ハイデッガー、ドゥルーズ、デリダなど、はやりの現代哲学に共感し、そこからデカルト、カントといった近代哲学を批判しようとしていましたが途中で行き詰まってしまう。あるシステムを変えるには、外側から非難するのではなく、内部からそのシステム自身の論理を展開することで変形をはかるべきだということに気づいたためです。人間は、正しいとか正しくないとか判断するのは別に、そう考えるよう歴史的・社会的に形成されてしまっているといった、通常ははつきりと意識していない思考の枠組みに従ってものごとを捉えています。現在の私たちにとって基本的なものとなっている思考の枠組みを典型的な仕方で表現している哲学者

お茶の水女子大学のご感想と、お茶大生へのメッセージをお願いします

踊りをはじめてしばらくして、舞踊教育学コースをもつ大学があると知ったときには感動しました。中に入ってみても、居心地のよい、負のエネルギーを発する人のいない、とてもいい大学だと思います。学生は優秀で真面目で、しかも柔軟性があります。一方で、優秀なのに自己評価の低い学生が多いことも気になります。皆がわかっていることをわかっていないという理由で自分は駄目だと思いついてしまう学生がいますが、皆がわかることをわからなければ駄目だと思ついても、一つでいいから自分にしかわからない問題、自分にしか作れない問題を探ってみる、といった方向性で考えてみたらどうでしょうか。またたとえそれで駄目だったとしても、絶望なんかする必要はありません。次を考えればいいんですから。

文責：荻原千鶴

(大学院人間文化創成科学研究科文化科学系教授)

卒業生紹介

ワークライフミックス ～「子連れ出勤」という働き方

東日本大震災による節電の影響で、日本人の働き方が大きく変わろうとしている。これを契機に、多様な働き方を模索する機運が高まってきている。授乳服メーカー「モーハウス」代表、光畑由佳さんは、「子連れ出勤」という就業スタイルを自社で実践し、「ワークライフミックス」という、古くて新しい働き方の提唱者として、いま、話題の人だ。

モーハウスを起ち上げる

倉敷出身の光畑さんが、お茶大被服学科に進んだのは、高校の家庭科の先生の影響が大きい。地方の名門女子大を卒業した先生は、凛として知的な存在だった。大学では、本人曰く「大人しくて地味な学生」だった光畑さんは、卒業後、(株)パルコで念願の美術企画の仕事に就き、キャリアのスタートを切る。その後、建築に興味を持ち、建築書の編集者に転職。結婚を機につくば市に移住してからは、夫の建築会社の事務を手伝うかわら、契約で書籍の編集も続け、2人の子どもの育児に励んでいた。1997年の夏、ある出来事が起こる。3歳の長女と、生後1ヶ月の次女を連れて外出の車中で、お腹をすかせた次女が大声で泣き出した。以前授乳を我慢して母乳が出なくなった辛い経験がよみがえり、周囲の冷たい視線を浴びながらも、思い切って胸をはだけて授乳をした。普通の女性だったら、これに懲りて子連れの外出を控えたかもしれない。光畑さんは違った。「母乳育児は自然なことなのに、産後のお母さんは外出もままならないのか」。この閉ざされた不自由な思いが、光畑さんに「授乳服」を開発する決心をさせる。決心すると速い。パルコや編集の仕事で培った企画力や人脈を駆使して、翌年「モーハウス」ブランドを起ち上げた。わずか5000円出資の「ゆるい」起業だった。元々、実家は倉敷で食器の小売店を営んでいたこともあり、小さな商店や会社は身近な存在だった。「小さく働く」は、ミツハタ流儀だ。

「子連れ出勤」という試み

しかし、試行錯誤を繰り返して開発した授乳服は全くと言ってよいほど売れなかった。「一



Mitsubata Yuka
光畑 由佳

時だから我慢」「外出しなければ必要のない贅沢品」といった声が聞こえてきた。光畑さんは、お母さんたちの心のバリアーを解くために、オープンハウス、ワークショップ、授乳ショーなど、さまざまな意識啓発活動を展開する。仲間は、仕事を始めたときに手伝ってくれたお母さんたちだ。会社組織にしたときに、「子連れ出勤」でスタッフになってもらった。子連れ出勤というと、職場の託児所に子供を預けて働くケースを思い浮かべるが、モーハウスでは、赤ちゃんを隔離せず、お母さんと赤ちゃんはセットで働くのが基本。いわば、家庭に子どもがいるのと同じ状態を、会社を持ってきているのだ。ワークとライフを無理に分けず、一緒にして自然体で働くスタイル、「ワークライフミックス」だ。今まで10年間で、150人の母親が、ワークシェアをしながら働いた。

現在、モーハウスでは、3カ所で子連れ出勤を実施している。つくば市の本社と、青山のショップ、つくば市にあるショッピングハウス内の売り場だ。授乳服の販売も、子連れ出勤の話題性と共に順調に伸びている。

社会、人とのつながりを求めて

「売れない授乳服を作り続けたのは、産後のライフスタイルを変えなかったから」と光畑さんは言う。授乳服に込めたのは、「子どもと

モーハウス代表

1987年
お茶の水女子大学
被服学科卒業

1987年
(株)パルコ入社

1992年
(株)パルコ退社
建築誌の編集に携わる

1997年
モーハウス設立
<http://www.mo-house.net>

著書に『働くママが日本を救う!～子連れ出勤という就業スタイル』

一緒にいたい」という思いと、「外に出て、社会と繋がってほしい」という願いは両立できるという、母親へのメッセージだ。「二兎を追うものは三兎を得る」というのが信条だ。「欲張るのは良いこと。自分も、仕事と生活を追っていくうちに、多くのつながりができ、思いがけない展開が拓けた」と光畑さんは言う。そして、いたるところで支えてくれたのが、お茶大ネットワークだ。「素晴らしい先輩たちの歩みが教えてくれたことは大きい。お茶大に入っていないければ、今の私はない」と振り返る光畑さんだが、しなやかに自由に人生を切り開く光畑さんの生き方は、今年、初夏の午後、「お茶の水女子大学論」を受講した満座の後輩たちを魅了していた。

文責:坪田秀子(学長特命補佐)

わたしのオフタイム

3児の母であり、モーハウスの活動に加えて、講演や取材の依頼が引きも切らない。講演は年に50回、取材も週に数本と多忙な毎日だ。都の研究所と共同で、ユニバーサル発想の下着の開発にも取り組んでいる。週末は、マッサージ、指圧、足揉みなど、人の手を借りてリラクセスするのが楽しみ。

附属学校園からのお知らせ

附属幼稚園便り

子どもたちを育てている幼稚園のお庭～春・夏・秋・冬～

本園の園庭は、昭和8年、本園がお茶の水の地から現在の大塚の地に移ってきた時に、主事であった倉橋惣三の「幼児をして十分に接せしめよ」「子供をして十分に四季をしらしめよ、四季を楽しませしめよ」(「幼稚園雑草」倉橋惣三全集第二巻 p.52)という考えを反映してつくられました。

園庭のまん中の花壇、夏には水が流れる川、いろいろな道から高台(通称お山の上)と下の庭とを行き来できる回廊式の園庭、高台には、本園のシンボルツリーとも言える大イチョウが、ゆったりと枝をひろげています。

子どもたちは、園庭で遊ぶことが大好きです。様々な樹木が生い茂り、高低差がある変化に富んだ園庭で過ごす日々の中で、子どもたちは、様々なことを感じ取っています。

豊かな環境の中に身をおき、ゆつくりと過ごし、興味をもったことに自分から取り組む体験を重ねる中で、心の根っこがしっかり育ち、探求心や思考力の芽が育まれていきます。

子どもたちを見守り、育てている、幼稚園の園庭の1年の様子を紹介します。

この便りが皆さんの手に届くころ季節は秋。園庭は赤や黄色に染まっていきます。

秋の美しさを体中で感じながら、幼稚園の日々を紡いでいきたいと思えます。



春：満開の桜がうれしい春をつれてくる。



夏：セミの声が響き渡る。節電の今年は緑のカーテンに挑戦！
ゴーヤ、ひょうたん、ヘチマなど、涼と共に収穫の喜びも！



冬：雪の朝、白一色に染まった園庭。
うれしい冬の贈り物。



秋：お山の上の大イチョウが黄色に染まる。
11月下旬、幼稚園の方向、斜め上方を見てください。
黄色に染まったイチョウの木が見えるはずですよ。

公開保育研究会 「環境に対する豊かな 感受性を育む」

平成20年度から上記のテーマのもと、研究をすすめています。平成20年度は「生き物」「園庭の実り」など具体物とのかかわりに焦点をあて、平成21年度は、さらに「時間」「空間」「空間・時間に漂うもの」という柱から事例を分析し、幼児が体験している内容について細かく省察をし、その成果を紀要にまとめました。平成22年～23年度は、室内環境に焦点を移し、さらに研究を深めています。

年2回開催している公開保育研究会には、日本各地から幼児教育に携わっている方々が集まり、具体的な子どもたちの姿をもとに話し合い、幼児理解を深め、教師の援助のあり方や環境のあり方について学び合う機会となっています。

公開保育研究会は、毎回子どもプロジェクト(生活科学部人間生活学科浜口順子准教授他の先生方)の協力を得て実施しています。平成23年度は、第一回公開保育研究会を9月16日(金)に実施、第二回は平成24年2月10日(金)に開催いたします。



全体会にて研究内容の発表



学年別研究協議会での話し合いの様子

【いずみナーサリー】

6月

- ・教育後援会総会
- ・ナーサリー室内開放
- ・子どもプロジェクトとの研究会
- ・避難訓練

7月

- ・歯科指導「乳幼児の歯について」(講師:保護者)
- ・食品衛生実務講習会
- ・避難訓練
- ・子どもプロジェクトとの研究会
- ・Ochasと夏野菜カレーパーティー

8月

- ・すいかパーティー

【附属小学校】

6月

- ・衣替え
- ・避難訓練
- ・委員会活動(5・6年生)
- ・放射能に関する講演会
- ・通学班別会、連携研究会
- ・1年生交通安全教室
- ・水遊び・水泳開始
- ・教育実習事後指導
- ・1・6年生郊外園活動(じゃがいもほり)
- ・茗鏡会新入会員<中1>歓迎会

7月

- ・私服併用登下校開始
- ・避難訓練
- ・委員会活動(5・6年生)
- ・校庭の芝生の補植活動
- ・第1学期終業式

8月

- ・5・6年生林間学校

【附属高等学校】

6月

- ・保護者授業参観日
- ・PTA救命講習会
- ・自治会総会
- ・第1回学校説明会
- ・1学期期末試験
- ・1期教育実習

【附属幼稚園】

6月

- ・年長組保護者対象CAP研修会①
- ・年長組保護者対象CAP研修会②
- ・親子で遊ぶ日
- ・学内保育公開・協議会(5歳)
- ・教育実習開始
- ・講演会
- ・誕生会
- ・プチバザー
- ・じゃがいも掘り(4歳親子・5歳親子)
- ・じゃがいもパーティー
- ・学内保育公開・協議会(3歳)
- ・中学生有志によるミニコンサート

7月

- ・子ども動物園・熱帯植物園見学(5歳)
- ・誕生会・七夕
- ・いきもの博物館(於:アトリエ)
- ・終業式
- ・メンタルヘルス研究会
- ・ラウンドテーブル

【附属中学校】

6月

- ・保護者参観日
- ・生徒理解研修会
- ・前期中間テスト
- ・教育実習
- ・2年生保護者会
- ・3年生郊外園(ジャガイモ収穫)実施

7月

- ・3年生第2回学力テスト(外部)
- ・保護者会
- ・お茶の子バザー
- ・2年生志賀高原
- ・夏休み開始
- ・帰国生編入検定

8月

- ・合同研・情報部会夏期セミナー
- ・夏休み終了
- ・教育実習Ⅱ期

7月

- ・2年農場実習(ジャガイモ収穫)
- ・1・2年学力テスト
- ・1～3年保護者会
- ・1学期終業式
- ・夏季クラブ合宿

キャンパス点描

お茶大インフォメーション・プラザがオープン!

お茶の水女子大学では、附属学校を含めた大学全体の広報を推進するために、正門横に「お茶大インフォメーション・プラザ」を設置しました。東日本大震災の影響で延期されていましたが、前学期授業最終日の7月13日(水)にオープン記念イベントを開催し、400人以上の方にご来場いただきました。

イベント運営に協力した学生団体「がん茶」(がんばれ、東日本!がんばれ、お茶大!)のメンバーからのレポートです。

「正門のすぐそばの、ほら、守衛室の横のきれいな場所。あそこになんかやつ。」

この説明なしにインフォメーション・プラザを語ることはできない。何しろインフォメーション・プラザの認知度は驚くほど低い。「何か工事しているのは知っていたけど…」「そう言えば最近あの辺きれいな場所になったよね」だいたいの方はこんな反応をする。斯く言う私も何のための施設なのかということはおろか、その存在すら最近まで知らなかった。

7月13日、そんなインフォメーション・プラザに遂にスポットライトが当たった。いつもは閑散としているあの広場に、今日はテントやのほりが立ち、何と人がたくさんいるではないか!

この日行われていたのはインフォメーション・プラザのオープン記念イベント。東日本大震災チャリティーセールとして、お茶大グッズ、福島県産玉ねぎのスイーツなどが販売された。広場にはテーブルや椅子も用意され、飲み物を飲みながら憩う学生や教職員の姿が見られた。実はこの広場とインフォメーション・プラザは、学外の方にも開かれた場所である。附属学校園を含めた大学全体の情報がここにに行けば手に入るという、いわばお茶大の窓口なのだ。

まだ行ったことのない人のために、プラザ内部を少しご紹介しておこう。足を踏み入れるとまず目に入るのは、きれいに並べ



られたパンフレットの数々。インフォメーション・プラザという名の通り、附属幼稚園・いずみナーサリーからお茶大大学院までの全ての案内をここで手に入れることができる。壁にはお茶大の日常風景を写した写真が飾られている。モノクロだといつもの景色が数割増して素敵に見えるから不思議だ。さらに、プラザの一角には今や定番となった新お茶大グッズが展示されている。学内の方にも是非チェックしてもらいたいところである。

しかし、このプラザは何もインフォメーションをもらいに行くだけの場所ではない。使い方によっては、インフォメーションを自ら発信することもできるのである。今回のイベントにも花を添えた福島県産玉ねぎのスイーツは、元は学内の震災復興支援団体「がん茶」と食に関するサークルOchasの活動から生まれたものである。イベント当日もがん茶とOchasから学生ボランティアが参加し、スイーツの販売を行った。風評被害について多くの人に考えてもらいたい、という学生からのインフォメーションが伝わったのではないだろうか。

インフォメーション・プラザはもちろん大学全体の広報の窓口ではあるが、せっかくできたこの広場を学内生が利用しない手はないだろう。今はまだまだ存在感の薄いインフォメーション・プラザだが、お茶大生が学内外に様々なメッセージを発信できる場となれば、多くの人にとって、より価値のある場所になるに違いない。

文責: 植村奏水(学生団体「がん茶」、文教育学部3年)



芸術・表現行動学科舞踊教育学コース「特別賞」受賞



8月7日(日)～10日(水)に開催された第24回全日本高校・大学ダンスフェスティバル(神戸)大学創作コンクール部門において、お茶の水女子大学芸術・表現

行動学科舞踊教育学コースの作品「人間の土地ーサン＝テグジュベリが見た世界ー」が、すぐれた動きのテクニックに対して贈られる特別賞を受賞しました。そして、受賞作品の上演が行われた特別プログラムを中心に、ダンスフェスティバルの様子は、8月21日(日)16:00～17:00にNHKEテレで放送されました。この大会は創作ダンスの全国大会で、部門としては舞踊家



や舞踊評論家、舞踊研究者をはじめとした審査員による審査を行う「創作コンクール部門」、創作ダンスというジャンルにこだわらず、HIPHOPや民族舞踊など、さまざまなダンスで参加することができる「参加発表部門」の2部門があります。

舞踊教育学コースでは毎年このコンクールに向け、4月から3ヶ月間かけて作品に取り組んでいます。コン

クールでは作品のテーマ性、独創性、動きのテクニック、表現力などが問われます。今年は、4月から5月は踊るための身体づくりをしました。6月は作品の中核となるテーマや方向性を明確にしました。7月はテーマにふさわしい作品の構成と展開を目指して完成度を高め、8月の本番に臨みました。1年生から4年生までの有志20数名で、ともに作品を深く追求することには難しさもあります。しかしなが

ら、異なる学年で切磋琢磨し、チームとして一丸となり活動する醍醐味があり、どの学年にとっても作品創作を実践的に学ぶ大変恵まれた機会になっています。

(舞踊教育学コース3年 大熊さとみ)

春の叙勲受章者(本学関係)について

平成23年春の叙勲受章者が発表されました。本学関係の受章者は、次の方々です。

瑞宝中綬章

酒本 雅之

清水 碩

お茶の水女子大学名誉教授

お茶の水女子大学名誉教授

瑞宝小綬章

中山 淑廣

元お茶の水女子大学事務局長



キャンパス風景

お茶の水女子大学学报 第230号

▽発行日：2011年10月1日

▽発行：国立大学法人お茶の水女子大学

東京都文京区大塚 2-1-1 (〒112-8610)

ご意見・ご感想はこちらまで

学術・情報機構広報チーム

電話 03-5978-5105

FAX 03-5978-5545

E-mail : info@cc.ocha.ac.jp

URL : <http://www.ocha.ac.jp/>

本誌、お茶の水女子大学学报「GAZETTE」は、
本学ホームページにも掲載していますので、どうぞご覧ください。